

第四百七十四回 青葉会句会報 令和七年十月二十三日(木)

於…三茶しやれなあど6階会議室 ビーナス

選者 川口孤舟

句会出席 柿崎忠彦 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ 豊田ゆたか

西澤國護 古田昇 星田啓子

投句・選句 熊谷くにお 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 福島正明 古川百合子

山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章 山本三恵



十三点

伊那谷の晴れて全村柿すだれ 康敏 (く・千・と・清・堂・ゆ・國・〇允・正・昇・百・啓・天)

十二点

◎子も孫も他郷に在りて小鳥来る 堂哉 (くす・孤・く・健・と・清・康・允・正・昇・啓・け)

八点

◎待宵や向かいの寺の鐘の音 正己 (くす・孤・五・千・孝・國・啓・天)

七点

八十歳あつと言う間の秋の暮れ 忠彦 (くす・た・堂・國・隆・正・百・くす・孤・健・孝・亜・け・〇盛)

◎鳥群るる畦に転がる捨案山子 昇

六点

どこからも城見ゆる街鳥渡る 康敏 (健・〇と・清・堂・け・盛)

◎あかあかと富士を染めたる秋夕焼 百合子 (孤・く・と・千・た・己)

◎秋の夜や孫のゼッケン縫い付ける 天牛 (孤・く・〇健・清・百・啓)

五点

浮き雲の白さ軽さも秋の空 國護 (五・た・清・〇己・亜)

穂をなすも花をなすのも秋の草 全 (〇くす・千・康・正・亜)

忠烈を語り継ぐ香や墓の菊 くに お (忠・健・堂・昇・三)

四点

海峡の大橋渡る今日の月 健介 (五・た・昇・三)

秋うらら手品のたねは明かすまじ とみ子 (忠・五・千・清)

◎林檎食べ集団疎開思い出す 正明 (忠・孤・隆・天)

三点

◎月見酒静かな夜に酔いしれて
古書街に観光バスの止まる秋
黒紙にきのこの胞子昼の月
長皿をはみ出す秋刀魚築地もの
穏やかな瀬戸の波間に秋の月
◎秋晴れや初孫入れる旅の風呂
◎身に入むる柱の傷やペットロス
ひと刷毛の心安らぐ秋の雲
◎検診の医師のつぶやきそぞろ寒
頬撫づる色なき風の忍び寄る
秋祭少年剣士は獅子と舞ふ

忠彦 孤・龍・允
五郎太 健・康・〇昇
とみ子 百・亜・三
千恵 ゆ・隆・天
ただしげ く・己・允
正己 孤・〇堂・ゆ
昇 孤・龍・隆
全 孝・正・百
全 忠・孤・盛
全 龍・け・〇三
けい子 千・と・康

二点

掛布団急に取り出す秋の夜
秋の通夜ひ孫五人に救われる
無花果や甘さぷちぷち舌の上
秋澄めり終の万年筆に会ふ
月光の間暗きに浮かぶ帯模様
劇場前落ち銀杏の匂ひおり
金毘羅の神輿の渡御や夜深し
秋晴れや牧師の笑みの過ぎにけり
信濃路や続く鐘の音秋の山
宅急便嬉し干柿故郷や
不意打ちのみじかき一生墓あらう
崩れつつ流るる雲や秋夕焼
仏壇に背高き薄（すすき）西日射す

忠彦 た・隆
健介 忠・龍
千恵 孝・昇
全 〇孝・三
全 〇龍・亜
全 正・天
全 康・己
ただしげ 天・三
ゆたか 己・ゆ
國護 己・百
全 くす・堂
百合子 己・允
啓子 亜・け
全 亜・け

一点

秋立ちぬ高さの違う今朝の風
蓬萊の城より望む瀬戸の秋
讃岐路は稲架が始まるちらほらと
松虫と競ふがごとく声を張り
日も落ちて搬出急ぐ美術展
政混沌として桐一葉
◎十五夜に群雲遊ぶいつまでも
秋の午後をんなばかりに歯科医院
◎ゴスペルの響く教会蔦紅葉

御殿場ゴルフ

白球の富士に向かふや鳥渡る
秋晴れの滝つばに少女手を清め
万博や空飛ぶクルマ秋日映ゆ

忠彦 五
忠彦 康
ただしげ 國
全 け
五郎太 啓
全 啓
全 孤
とみ子 龍・
全 孤
康敏 孤
堂哉 盛
ゆたか 孝
全 盛

山風に遅速ありけり紅葉谷
届きたる新酒の香り胸おどり
受賞者の笑み爽やかや朝テレビ
酷き夏くぐり抜ければ爽秋や
水引の紅（あか）濃くなりぬここ三日
小鳥来るふわりと羽根の舞ふ川辺
天高し今に残れる沈下橋
風通り一人の闇に秋の声
年とれど玉蜀黍はかぶりつく
星流る歴史の重み墓仕舞
陽は昇り静かに沈む菊日和
大リーガーの髭もタトウも燃ゆる秋

ゆたか
（く）
國護
（允）
正明
（忠）
百合子
（國）
啓子
（隆）
全
（ゆ）
亜也
（五）
けい子
（啓）
天牛
（と）
盛雄
（た）
全
（國）
全

【句評・短評】

十三点句

伊那谷の晴れて全村柿すだれ

康敏

千恵さん・・・干柿大好き人間としては何本ものすだれとなって干されている柿をみるとこれぞ秋！
と感じます。全村とは圧巻！

とみ子さん・・・伊那谷の晴れやかな暖かい秋の日差しが、見えるようです。

ゆたかさん・・・情景が目に浮かびます。

堂哉さん・・・色鮮やかな景色ですね！

允章さん・・・晴れ渡った伊那谷の青空の下、どの村の家々にも真っ赤に熟れた干し柿が吊るされている。平和で豊かな秋の景が見える。

百合子さん・・・情景が目につかびます。郊外の街中でも以前は見掛けた光景、懐かしい！

天牛さん・・・小さい村が山に囲まれています。全村が濃い黄色の吊るし柿をぶらさげています。

綺麗ですね。

十二点句

子も孫も他郷に在りて小鳥来る

堂哉

孤舟選者・・・いまでは一族が集うのは正月一回になってしまったが、今年はそれに先立ち小鳥たちが山地から平野に降りてきて、我々老夫婦のご機嫌伺いに来てくれた。

とみ子さん・・・皆んな元気であればそれが一番とは思いますが、小鳥に慰められているかもしれませんね。

康敏さん・・・庭に来た小鳥に、我家から出て行った子や孫に思いを馳せる。寂しさがよく分かる。

八点句

待宵や向かいの寺の鐘の音

正己

孤舟選者・・・柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺 正岡子規

五郎太さん・・・十五夜の前後、よくある景ですが、「の」で続く中七の調子がいい。「向かい」は、「向い」の方がいいか。

千恵さん・・・なにやら、柿喰えば・・・の世界ですね。“待宵”が雰囲気を醸し出しています。

天牛さん・・・向かいの寺は大河をはさんだ向こう岸の寺のように思えて、鐘の音に深さを感じます
いい句ですね。

七点句

八十歳あつと言う間の秋の暮れ

忠彦

ただしげさん・同じ年代であり、非常に納得感がある。

隆さん・・・おそらく百歳でもアツという間でしよう。いつの年代にも言えそうです。人生を的確に表現しています。

百合子さん・・・あつという間の繋ぎが効いてますね。

鳥群るる畦に転がる捨案山子

昇

孤舟選者・・・俺が全盛期なら、お前たち鳥どもを追い払うのは朝飯前なのに残念だ。

亜也さん・・・用済みを殊更強調するような情景の中に見出した詩情。

盛雄さん・・・役割を終えた案山子は次の仕事まで満足そうに眠っている。

六点句

どこからも城見ゆる街鳥渡る

康敏

とみ子さん・・・城下町のたたずまいや自然の景が、大きく美しいです。

秋の夜や孫のゼッケン縫い付ける

天牛

孤舟選者・・・明日は可愛い孫の運動会。孫のシャツにゼッケンを縫い付けられるとはお婆ちゃん冥利に尽きる。

健介さん・・・スポーツ選手の孫の成長と活躍は生き甲斐。

あかあかと富士を染めたる秋夕焼

百合子

孤舟選者・・・太陽の光を受けて暗赤色に色ついて見える富士山。

とみ子さん・・・日本画のような良い景色ですね。

千恵さん・・・我が家からも富士山が観られます。オレンジ色に染まった空をバックに富士のシルエットが浮かび上がるこの時間。いつもうつりと観ています。

ただしげさん・赤富士の夕景が目につかぶ。

百合子さん・母の姿を思い出しました。針仕事は母の専売特許でした。

五点句

浮き雲の白さ軽さも秋の空

國護

五郎太さん・・・白さ軽さが巧みです。

ただしげさん・中七の表現が秀逸。

正己さん・・・爽快！気持ちの良い秋の日！

亜也さん・・・「白さ軽さ」への着眼の素晴らしさ。

穂をなすも花をなすのも秋の草

國護

千恵さん・・・すすき、おみなえし、萩等秋の草は楚々としていて詩心を誘う????

康敏さん・・・秋草の様子を上手く表現している。

亜也さん・・・穂も秋ならではの風情。

四点句

海峽の大橋渡る今日の月

健介

五郎太さん・景色が大きい、人工と自然の配合を頂きました。

秋うらら手品のたねは明かすまじ

とみ子

五郎太さん・楽しい句、「うらら」が仮名書きなのも優しくていい。

千恵さん・きつと家族の前で披露されている手品。ネタは明かすまでもなくバレバレだったりして。

林檎食べ集団疎開思ひ出す

正明

孤舟選者・・・長野のお寺に親と別れ子供だけが収容されて。殊に夜は寂しくて心細かった。

隆さん・・・元上司は、義宮（よしのみや 常陸宮親王殿下）様らご学友と日光に疎開したと。

上皇陛下はさらに奥へ疎開された。義宮様が缶詰をお持ちで、それを召し上がりお腹をこわされたと言話を聞いた。

天牛さん・・・素朴な林檎をたべた、食糧不足の時代を思い返している人は幾つでしょうか。九十過ぎた私も懐かしく思いました。

三点句

月見酒静かな夜に酔いしれて

忠彦

孤舟選者・・・「月見に団子」ならぬ「月見に一杯」は乙なもの。

龍平さん・・・歳を取ると 美形のお酌も要らない 有り難い幸せ

古書街に観光バスの止まる秋

五郎太

康敏さん・・・古書街に観光バスとは珍しい。古書祭でもやっているのだろう。古書好きにはたまらない。

昇さん・・・神保町の秋の古本まつり。私も好きでよく行きました。外国人観光客のバスが止まる時代になったとは。意外性のある句。

黒紙にきのこの胞子昼の月

とみ子

百合子さん・・・きのこの不思議、胞子の不思議、≡≡『ワイルドライフ』の世界。

亜也さん・・・胞子紋とやら何のための観察か分かりませんが、面白い取合わせ。「昼の月」は季語とはしないものと理解。

長皿をはみ出す秋刀魚築地もの

千恵

ゆたかさん・・・今年の秋刀魚は大ぶりですね。

隆さん・・・今年は、お店で丸々太った大きな秋刀魚をよく見かけます。

「長皿に身を余すほど秋刀魚かな」でも。

天牛さん・・・今年の秋の魚は成長が良く太っています。大きいです。特性の皿も小さくて間にあはなかった。築地ものがきいていますね。

秋晴れや初孫入れる旅の風呂

正己

孤舟選者・・・まだ首も座っていないこんな華奢な赤子を私が風呂へ入れられるだろうか。心配だ。堂哉さん・・・人生の最高に幸せな時間ですね！

ゆたかさん・・・旅の風呂が面白いです。

身に入むる柱の傷やペットロス

昇

孤舟選者・・・愛犬が生前引つ掻いた柱の傷を見るたびに、しみじみものの憐れを感じる。

隆さん・・・ペットを飼っておられる方のペットロスはよく聞きます。母を秋に亡くしましたので、秋になると母ロスが身に入みます。「身に入むや愛犬（猫）遺す柱傷」でも。

ひと刷毛の心安らぐ秋の雲

昇

百合子さん・・・年経るほどに、ひと刷毛の潔さ、に心安らぎます。

検診の医師のつぶやきそぞろ寒

昇

孤舟選者・・・医師の見立てはさほど重篤なものではないが、とりあえず緊急処置をした方がよいとのこと。

盛雄さん・・・ドクターは何を考えているか判らないが、気にしない事。

頬撫づる色なき風の忍び寄る

昇

三恵さん・・・季語がわからず、恥かしながら早速調べました。秋の風は眼にはみえず、寂し気な静けさを表現されているとのことですが、まさしく日本人独自の感性と美意識が想起されます。「秋きぬと目にはさやかに」古今和歌集にも通じますね。

秋祭少年剣士は獅子と舞ふ

けい子

千恵さん・・・今や少数派の剣道男子？日頃の鍛錬を獅子と共に披露する姿が微笑ましいです。
とみ子さん・・・少年剣士と獅子の取り合せを新鮮に感じました。
康敏さん・・・凛々しい少年剣士が秋の祭に相応しい。

二点句

掛布団急に取り出す秋の夜

忠彦

ただしげさん・状況が良く理解できる。

隆さん・・・本当に寒気が急に来ました。「秋の夜急に引き出す掛け布団」でも
秋の通夜ひ孫五人に救われる

健介

龍平さん・・・今どきなんというお幸せな方。

秋澄めり終の万年筆に会ふ

千恵

孝岳さん・・・僕は万年筆好きなので、この句が気に入りました。色々な万年筆を経験したが、年を取って最後に満足出来るものに出会った満足感が、秋澄めりに表れています。

月光の間暗きに浮かぶ帯模様

千恵

龍平さん・・・見事な考え込ませる情景です。私は先月表れた名月をスマホに撮り 次の芭蕉句を添えてメル友へのご挨拶としました。〈おもかげや姥ひとりなく月の友〉

劇場前落ち銀杏の匂ひおり

千恵

天牛さん・・・東京都の木ですから、東京はいろんな場所に銀杏の木があります。ところかまはず匂いを放ちます。

金毘羅の神輿の渡御や夜深し

ただしげ

康敏さん・・・金比羅さんの例大祭の御渡御は、本堂より神事場までの2キロを500人の神輿行列が続く。下五の「夜深し」が効いている。

秋晴れや牧師の笑みの過ぎにけり

ゆたか

天牛さん・・・清潔な牧師が清らかな笑みをみせてくれる、さわやかな秋晴れですね。

信濃路や続く鐘の音秋の山

國護

ゆたかさん・・・情景が見事に表現されています。

宅急便嬉し干柿故郷や

國護

百合子さん・・・祖母存命中は、秋の到来は梨や笹団子の到来でもあり、嬉しかった記憶です。

不意打ちのみじかき一生墓あらう

百合子

堂哉さん・・・事故か病気かそれとも戦争か、気の毒なことでした。

仏壇に背高き薄（すすき）西日射す

啓子

※康敏さん・・・薄と西日（夏）の季重なりです。

一点句

秋立ちぬ高さの違う今朝の風

忠彦

五郎太さん・・・観察の鋭さ、あるいは感覚の豊かさ。風の音ではなく、風の高さで秋を感じる詩人。
蓬萊の城より望む瀬戸の秋

ただしげ

康敏さん・・・小高い丘の上にある讃岐の丸亀城（蓬萊城）から瀬戸内海の眺望は四季を通してすばらしい。

日も落ちて搬出急ぐ美術展

五郎太

啓子さん・・・今日でこの美術展も終わり。美術館では明日以降の別の展示準備が予定されている。出品した画廊の人、運搬のプロたちの慌ただしさが描かれる美術館の裏手。芸術の秋だなあと感じます。

十五夜に群雲遊ぶいつまでも

とみ子

孤舟選者・・・折角名月を賞でようと思って待っていたのに。早く雲が切れてほしい。

ゴスペルの響く教会蔦紅葉

康敏

孤舟選者・・・掌状で鮮やかな蔦紅葉は、教会の外壁や塀によく映える。

御殿場ゴルフ

白球の富士に向かふや鳥渡る

堂哉

盛雄さん・・・遠い日に富士裾野のゴルフ場で楽しんだ日々が懐かしい。

秋晴れの滝つぼに少女手を清め

ゆたか

※康敏さん・・・秋晴と滝壺（夏）の季重なりです。

水引の紅（あか）濃くなりぬここ三日

啓子

隆さん・・・確かに、山野草の水引の紅白は秋らしい。「藪中に紅白まぶし水引草」でも

小鳥来るふわりと羽根の舞ふ川辺

啓子

ゆたかさん・・・ふわりと羽の、の表現が見事です。

天高し今に残れる沈下橋

亜也

五郎太さん・・・山奥の川に沈んだ木橋を想像しましたが、四万十川に沢山ある手すりのないコンクリート橋でしようと教わりました。

風通り一人の闇に秋の声

けい子

啓子さん・・・誰しもが持つ多様な「闇」。澄んだ風が通り抜ける夕間暮れの帰り道、なぜかこの闇が心をよぎる。

年とれど玉蜀黍はかぶりつく

天牛

ゆたかさん・・・情景がおもしろいです。

星流る歴史の重み墓仕舞

盛雄

とみ子さん・・・季語がよく効いていると思います。

陽は昇り静かに沈む菊日和

盛雄

ただしげさん・・・秋の朝の感じを上手に詠んでいる。



【次回青葉会・青葉会初句会】

◎十一月二十七日(木) 午後一時〜

於…世田谷区施設 三軒茶屋しやれなあど6階

ご出句…ご出席予定の方は五句 ご投句の方は二句を目処として、星田宛お送り下さい。
ご出句締め切り…十一月二十二日(土) 中

◎令和七年青葉会納会 十二月十八日(第三木曜日)

午後一時〜

句会 世田谷区施設三軒茶屋 しやれなあど6階 ビーナス

※ご出席の方は、5句、ご投句の方は2句を目処として

十二月十四日(日) 中までに、星田宛お送りください。

午後四時半〜

納会忘年会 銀座アスター三軒茶屋賓館にて例年同様忘年会を開催

※会費 一万円申し受けます。

※ご予約繰り合わせて頂き奮ってご参加いただけましたら幸いです。

ご出席いただける方は、十二月十一日(第二木曜日)までに、星田までお申し越し頂きたくよろしくお願い申し上げます。

◎令和八年初句会は 令和七年一月二十二日(木) 於…丸紅本社4階 会議室 を予定。

~~~~~

【青葉会報】

一、 令和七年十月青葉会は、九名のご出席でしたが、孤舟選者から未だリハビリのためご入院中に拘わらず、選句だけでもとのお気持ちをいただき、通常と変わらぬ十句の選句を頂戴することができました。紙上を以て御礼申し上げます。併せてその後のご様子を伺いますと、順調な回復と言ってよろしいようで、現状では予定より少し早めの十二月初旬にはご退院の予定となったとのことです。充分にリハビリを続けられ、ご無事なご退院をとお祈り致します。

二、 句会の結果は、ご覧のように、先月に似て満遍なく票が分かれる局面も見られ、一点句は全七十一句中二十四句にもなっております。自由の気風ある青葉会らしい全体結果と言えるかとも見える気が致しますが、如何でしょうか。  
そうした中で、十三点の高得点に康敏さん、次点の十二点に堂哉さん、次は点数の間が空いて八点到正己さん。正己さんは三年目に入ったばかり。これまでの中でご自身いちばんの高得点、おめでとうございます。また、そろそろ五年目になりましょうか、國護さんの佳句、今回ご出句五句の内二句が五点を獲得されています。

【関係者近詠】

無人駅に夏草喘ぎ廃線論

眞希子

炎昼のビルの谷縫ふバイク便

全

「病める時も」今ぞその時カンナ燃ゆ

全



正座して小さな裸足動き詰め  
ホスピスの門限大目大西日

全 全

藁焼きへはたく財布や初鰹  
古本屋に沈む古本栗花落かな  
形代の姉の名太く書直す  
形代ののっぺらぼうへ命吹く  
戦争を蠅打つごとく報道官  
悪童の水鉄砲捨てカタバルト  
浅間嶺にとろりとかかる夏至の雲

弘子  
全 全 全 全 全 全 全

人生に深き淵あり蟬しぐれ  
出藍の誉れ老いたり夏の雲  
かはせみや水と光と光と水と  
無花果を握ればいのちこぼるるよ  
蟬去りぬチツと舌打ち一つして  
帰省の児部屋の汚れをうるさく言ふ  
深き友浅く消えたり糸とんぼ

青史（陽亮）  
全 全 全 全 全 全 全

令和七年十一月十日

（了）